

- 令和**
- 2019年 サンエー浦添西海岸パルコシティが開業
 - 2019年 センソーレレンが沖縄に出店
- 平成**
- 1993年 沖縄ジャスコ(株)(現イオン琉球)がジャスコ那覇店(現イオン那覇店)を開業
 - 1999年 沖縄山形屋が閉店
 - 2014年 (株)沖縄三越が閉店
 - 2015年 イオンモール沖縄ライカムが開業

- 昭和**
- 1930年 沖縄初の百貨店・山形屋(後の沖縄山形屋)開店
 - 1954年 百貨店リウボウ開店
 - 1954年 プラザハウスショッピングセンター開業
 - 1957年 大越百貨店(後の沖縄三越)開業
 - 1970年 (株)サンエー開業
 - 1975年 神戸に拠点置く(株)ダイエーが那覇ショッピングセンター(後のダイエー那覇店)開店
 - 1975年 千葉に拠点を置く(株)プライマートがプライマート沖縄設立
 - 1979年 (株)大城商店がファミリープラザ丸大を展開
 - 1983年 (株)リウボウ総合開発がリウボウストアを展開
 - 1983年 金秀商事(株)がタウンプラザかぬびを展開
 - 1984年 (株)野高商会在がフレッシュプラザユニオンを展開

沖縄百貨店・スーパーマーケット年表

第8回 百貨店・スーパーマーケット編

産業の歴史をひもとく年代記 沖縄産業 クロニクル

県民の暮らしに密接に関わるさまざまな産業はどう始まった? その変遷と展望を紹介します。

監修・山内昌斗(専修大学経営学部教授)

多様な消費文化が融合する 小売業

かつて、沖縄の人々は食料品や日用品を露店商や行人から購入していました。店の人と客が話し合っって価格や数量を決める相対(あいたい)売りにより、取引が行われました。明治になると、沖縄の商業に変化が起きます。その担い手となったのが、県外出身の実業家である寄留商人。寄留商人たちは常設の店を構え、商品に値札を付けて販売しました。商店が立ち並び那覇の東町は、商業の中心地として栄えました。

沖縄経済に成長が見られるようになると、1930年に

注目トピックス



3 日本本土の食文化を伝えたダイナハ

1975年、神戸に拠点を置くダイエーが那覇市内に出店しました。店はダイナハと呼ばれ、親しまれました。売り場には本土の最新ファッションアイテムのほかに、サンマや納豆、ヨーグルトなど、県民に馴染みがなかった食材が並べられ、県民の生活に変化を与えました。



2 日本初のショッピングセンタープラザハウス

1954年7月4日のアメリカ独立記念日に、米軍人・軍属を対象としたショッピングセンター・プラザハウスがコザ市(現・沖縄市)に誕生。プラザハウスは日本初のショッピングセンターともいわれています。南国に誕生した異国情緒が漂う店は、アメリカ消費文化の発信地となりました。



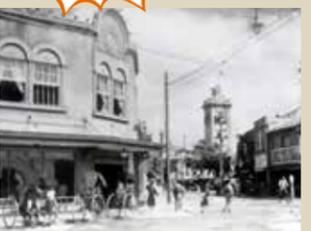
1 現在も残る相対売りの景色のうれんプラザ

店の人と客が話し合っって価格や数量を決める取引のことを相対売りといいます。現在でも、その様子を那覇市樋川にある「のうれんプラザ」で見ることができます。季節にもよりますが、日曜を除く早朝6時頃に建物内の相対売場を訪れると、にぎやかで懐かしい場面に出会うことができます。



戦前、那覇の東町にあった山形屋。販売員は標準服を着用していた(那覇市歴史博物館提供)

初の百貨店誕生!



1964年12月、那覇の大越百貨店 歳末風景(沖縄県公文書館所蔵)

クリスマスと新年の装飾が華やか



戦後の日リウボウ店内(那覇市歴史博物館提供)

たくさんの買い物客でにぎわう店内



2015年にイオンモール沖縄ライカム、2019年にサンエー浦添西海岸パルコシティと、大型ショッピングセンターが開業(イオンモール沖縄ライカム、サンエー浦添西海岸パルコシティ提供)

話題となった大型ショッピングモール



1979年にオープンしたファミリープラザ丸大(南風原店)((株)丸大提供)

1970年代はスーパーが続々誕生

グローバル化時代のローカリゼーション

県外・海外から小売業の出店が相次ぐ中、県内企業に見られるのが徹底したローカル化。熟々の豆腐や箱入りツナ缶などの商品を取り揃えるほか、地元企業とコラボ商品を開発するなどの工夫がなされています。グローバル化時代には消費の均一化が進む一方、地方の個性が引き立つ特性があります。多様な消費文化を経験した沖縄は個性にあふれており、消費者との対話から生まれた経営が企業の成長・発展の鍵を握るかもしれません。

